

福岡工業大学 機関リポジトリ

FITREPO

Title	近代社会環境への警笛-夏目漱石の場合
Author(s)	徳永 光展
Citation	福岡工業大学研究論集 第39巻1号 P7-P25
Issue Date	2006
URI	http://hdl.handle.net/11478/425
Right	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

Fukuoka Institute of Technology

近代社会環境への警笛

—— 夏目漱石の場合 ——

徳 永 光 展 (社会環境学科)

An Alarm to Our Modern Social Environment — The Case of Sôseki Natsume —

Mitsuhiro TOKUNAGA (Department of Social and Environmental Studies)

Abstract

This paper attempts to review the ways in which Sôseki Natsume portrayed his indictments of Japanese society. Sôseki's critique was concerned with the speed at which Western ideas were being inculcated into Japan. He writes with a sense of crisis; for example, in Sanshiro Ogawa's statement that "Meiji thought had been reliving three hundred years of Western history in the space of forty" (*Sanshiro*). Consider also Ichiro Nagano's sentiments "Man's insecurity stems from the advance of science" and "It is frightening because the fate which the whole of humanity will reach in several centuries, I must go through—in my own lifetime—and at that all alone" (*The Wayfarer*). Daisuke Nagai's criticism predicts the results of this unreasonable rate of development: "A people so oppressed by the West have no mental leisure, they can't do anything worthwhile" (*And Then*). While the Meiji era was one in which Japan insatiably sought to import Western constructs of social order and culture, recurring depictions in novels, lectures, diary entries, and other forms of expression of Sôseki's strong concerns about the climate in which this was taking place reveal that he was establishing the concept of individualism and simultaneously taking great pains to determine how one could successfully adapt to society.

Keywords: *modern social environment, Sôseki Natsume, Meiji era, individualism*

1. 問題の所在

作家が同じテーマを繰り返し作品の中で追求する現象は珍しくないが、夏目漱石について言うならば、当時の日本を取り巻く社会環境や国家に関する見解を小説の中で登場人物に託し、執拗に語らせている様子が注目に値する。そのような箇所からは西洋の達成を性

急に輸入し、真似続ける無理を重ねながら、不自然な速度で社会発展を遂げる日本の慌しさに諦念を抱きつつ、その過程で生じる歪みを明確に認識していた漱石の様子が理解できるのだが、小説以外の形で残された様々な資料、例えば、講演、日記、断片などを併せて見ると、彼の幅広い識見に基づく思考過程はより明確に立ち現れてくる。

慶応3年生まれである漱石の満年齢と明治の年号が偶然の一致を見せている現象に象徴されるまでもなく、漱石は明治という「日本における国民国家形成のその

過程と共に成長していった」¹¹作家であった。例えば、『心』の中で先生に明治天皇崩御の際の感慨を「私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。」¹²と回想させている箇所などは漱石自身の意識が濃厚に反映したものであると言えるであろう。

本稿はこのような問題意識に立ち、社会や国家に関する問題点が各作品においてどのように描かれていたかを広く概観し、その特質に言及しようとするものである。

2. 性急な開化

夏目漱石は明治40年に発表した『野分』の中で「明治の四十年は先例のない四十年である」¹³という言い方を清輝館での演説会に臨んだ文学者・白井道也にさせているが、「明治の思想は西洋の歴史にあらはれた三百年の活動を四十年で繰り返してゐる」¹⁴という三四郎の言葉と併せて考えてみると、当時の日本社会に対する漱石の認識は変化が常軌を逸した早さで進行する状態への憂慮であり、〈文明〉の興隆が「日清戦争後の帝国主義的論調が渦巻くなか、知識人によって盛んに鼓舞された」¹⁵時代風潮に対応し切れぬ状況への戸惑いがあったと見ることができる。小説以外の著作を見ても、例えば漱石の師であったジェームズ・マードック (James Murdoch) による『日本歴史』(A History of Japan) の書評 (明治44年) において「維新前は殆んど歐洲の十四世紀頃のカルチュアーにしか達しなかつた国民が、急に過去五十年間に於て、二十世紀の西洋と比較すべき程度に發展したのを不思議がるのである」¹⁶と記してあるような類似の表現に行き当たることから、この問題に対する漱石の関心の深さがうかがえるのである¹⁷。

漱石が西洋との対比的視点に立ち得た背景には明治33年から35年にかけてのロンドン留学体験¹⁸が決定的な役割を果たしたと理解すべきであろう。「日本ハ三十年前ニ覚メタルト云フ然レドモ半鐘ノ声デ急ニ飛ビ起キタルナリ其覚メタルハ本當ノ覚メタルニアラズ狼狽シツ、アルナリ只西洋カラ吸取スルニ急ニシテ消化スルニ暇ナキナリ、文学モ政治モ商業モ混然ラン日本ハ真ニ目ガ醒ネバダメダ」¹⁹という滞英中の日記 (明治34年3月16日) に見られる記述を始めとして、漱

石は体験した環境¹⁰に強く影響を受け、「英国の文明と日本の文明、両者の民度の比較を強いられてしまった」¹¹かのような言説を憑かれたように繰り返しているからである。

漱石は留学直後の明治36年4月に第一高等学校、並びに東京帝国大学の講師に就任し、東大で〈英文学概説〉を講義した。その内容をまとめた『文学論』(明治40年)の序では「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。」¹²と述べている。同様の感じ方は胃潰瘍悪化による修善寺での大量吐血 (明治43年8月24日) 後に執筆された『思ひ出す事など』(明治43~44年)の中でも「曾て英国に居た頃、精一杯英国を悪んだ事がある」¹³とあって回想されている¹⁴。こうしてみると「日本人ガ西洋へ来テ西洋化スル 是 assimilation ノ結果ナリ」¹⁵とノートに記しつつ、また、「吾は日本の人なり、天下の民なり。日本を挙げて吾を容れずんば天下に行かん。天下を挙げて吾を容れずんば天下を去らん。天下を去るは己を屈して天下に容れらるゝの恥に優る。」(明治38,9年 断片32D) ¹⁶と断言して憚らない漱石が当地で「自分が異質の文化のなかを漂う萍のような存在であることを、深刻に自覚させられる」¹⁷体験こそが同時代の社会、ひいては国家に対する問題意識を先鋭化させ、醒めた目で「今ノ日本人ガ西洋人ノ名前ノ新ラシイノヲ引張ツテ来ルノハ此等ヲ崇拜スルヨリモ此等ヲコニスル pride ヲ得意トスルノダカラツマリハ他ヲ admire スルノ声デナクツテ自己ヲ admire スルノ方便デアル」(明治43年 断片52) ¹⁸とまで言わせる程の西洋崇拜主義批判を可能にしたと解釈できるのである。

「倫敦といふ処は自由の都だとか何とか倫敦の市民は威張つて居るがなか／＼以てさうで無い。天然人事共に種々の圧迫がある中に習慣の圧迫といふやうなもの是最激しい」[『ホトトギス』11巻10号, 明治41年7月1日] ¹⁹と回想される環境は、〈西洋〉〈日本〉〈自己〉〈自己と日本の行末〉と言った問題を漱石に突き詰めさせ²⁰、「文明開化の手本として日本のはるか先を進むイギリスではあつても、そこに暮らす人間の生活は決して幸福とばかりは言えないという事実、文明の發展はいずれ停止し国家が衰弱の運命をたどるのは必然の運命だという観察」²¹へも導いた。漱石は明治44年8月15日には和歌山で開催された大阪朝日新聞記者招聘講演会にて『現代日本の開化』と題した講演

を行っている。そこで彼は欧日比較の観点に立って「西洋の開化（即ち一般の開化）は内発的であつて、日本の現代の開化は外発的である」²²⁾と位置付け、「現代日本の開化は皮相上滑りの開化である」²³⁾と評価し、日本の発展は外圧によって生じた不自然なものとして結論付けているが、この議論からうかがえるのは「機械的近代化を支えるはずの内部の精神の近代化はないということに大きな不安があるということ」²⁴⁾への憂慮に他ならない。

漱石は同様の問題を小説の中でも扱っている。例えば、『行人』では大学教授の長野一郎は弟の二郎に向けて「今の日本の社会——ことによつたら西洋も左右かも知れないけれども——皆な上滑りの御上手もの丈が存在し得るやうに出来上がつてゐるんだから仕方がない」²⁵⁾と述べているのである。

このような社会環境とは「Self-consciousnessの結果は神経衰弱を生ず。神経衰弱は二十世紀の共有病なり。」（明治38,9年 断片32D）²⁶⁾、「神経衰弱は文明の流行病である」²⁷⁾（『虞美人草』）と言わざるを得ない状況を生む。漱石の「神経衰弱」に対する強いこだわりは『坊っちゃん』で1例²⁸⁾、『それから』で2例²⁹⁾、『門』で4例³⁰⁾、『彼岸過迄』で1例³¹⁾、『行人』に5例³²⁾、『心』に3例³³⁾といった形で継続的に用例を確認できる状況から如実にうかがえるのである³⁴⁾。

『草枕』では画工が「余裕は画に於て、詩に於て、もしくは文章に於て、必須の条件である。」³⁵⁾と述べているが、余裕を個人・社会が共に喪失している様子への言及は『三四郎』の中にも以下のように存在している。

現代人は事実を好むが、事実に伴ふ情操は切棄てる習慣である。切棄てなければならぬ程、世間が切迫してゐるのだから仕方がない。其証拠には新聞を見ると分る。新聞の社会記事は十の九迄悲劇である。けれども我々は此悲劇を悲劇として味はう余裕がない。たゞ事実の報道として読むだけである。³⁶⁾

事実を解釈する余裕を失った時代風潮を危惧した漱石は文明開化の象徴さえもが皮肉な結果をもたらすことに気付いていた。『草枕』では汽車が文明の象徴として位置付けられているが、文明の利器というべき乗り物に個性の抹殺をもたらす存在との評価が下される。以下の批評からは「近代社会を誕生させた人間は自由を得たものの近代社会に「鉄柵」を生み出し、この内部によってしか自由を認められず、そして次第にその

内部で個性が踏み付けられることによって人間性が失われ、同質化された人間は「汽車」という近代社会に乗りただ駆けて抜けて行く」³⁷⁾かのような様子が読み取れるのである。

汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつて、さうして同様に蒸汽の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云ふ。余は積み込まれると云ふ。人は汽車で行くと云ふ。余は運搬されると云ふ。汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつて此個性を踏み付け様とする。一人前何坪何合かの地面を与へて、此地面のうちでは寝るとも起きるとも勝手にせよと云ふのが現今の文明である。同時に此何坪何合の周囲に鉄柵を設けて、これよりさきへは一步も出てはならぬぞと威嚇かすのが現今の文明である。何坪何合のうちで自由を擅にしたものが、此鉄柵外にも自由を擅にしたくなるのは自然の勢である。³⁸⁾

こうして発展を遂げる社会事象に孕まれる問題は比較文明的視野の中で述べられるのだが、「ヴィクトリア女皇死去後、近代の機械文明によって、人間性喪失を余儀なくされ、崩壊の危機に瀕しているロンドンの街に単身留学して来た」³⁹⁾経験に基づく知見であることは疑うべくもなく、開化によって逆に引き受けざるを得ない精神的圧迫が確実に洞察されていることが理解できるのである。

3. 自己本位の提唱

『野分』では自らの内面より湧き上がってくる感情こそが人生において目指すべき理想とならねばならないと演説会で力説する白井道也の姿が描かれている。内発的な文明開化が好ましいことは前述の『現代日本の開化』に述べられる通りであるが、そのような姿勢、つまり自然な欲求に基づく物事への対処は個人の生き方や行動における基本であるという事実に道也はこだわっているのである。

漱石は大正3年11月25日に学習院で『私の個人主義』と題して講演するが、そこでは『野分』の道也を自ら演じるかのように「西洋に対する主体性・自律性」⁴⁰⁾を「私は此自己本位といふ言葉を自分の手に握

つてから大変強くなりました」⁴¹⁾と力説する。この境地は「西洋の模倣からの離脱であり、自由と独立の精神の振起でありながら、そのためかえって人格の自由と独立を中心とする西洋近代の倫理思想を生々と吸い上げてその内容としていることは明かであり、到底従来の儒教や武士道などの思想に見出すことのできない、個人の自覚を含んでいる」⁴²⁾と見ることができよう。換言すれば、「朝日新聞入社を契機として、漱石文学に生動しはじめたものは、疑いもなく漱石の近代的自我であり、その「自己本位」に即した社会批判ないし民族批判にほかならなかった」⁴³⁾訳だが、漱石が文学者として「自己本位」という立場に立って、イギリス人が行ってきた伝統的な解釈から自由に、かつ独創的にイギリス文学の学問的構築にとりかかった」⁴⁴⁾転機が留学生活の過程に存在した事実は以下の箇所からよくうかがえるのである。

此時私は始めて文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救ふ途はないのだと悟つたのです。今迄は全く他人本位で、根のない萍のやうに、其所いらをでたらめに漂よつてゐたから、駄目であつたといふ事に漸く気が付いたのです。⁴⁵⁾

『野分』の道也は時代の潮流を「文明の社会は血を見ぬ修羅場である」と凝視し、「血を見ぬ修羅場は砲声剣光の修羅場よりも、より深刻に、より悲惨である」⁴⁶⁾と位置付けるが、ここからは他人本位になっていれば競争の結果が周囲にどのように受け止められるかに注意が集中し、常に不安に苛まれ、幸福からは程遠い精神状態を引き受けなければならなくなる状況に対する漱石の洞察⁴⁷⁾がよく分かる。競争から逃れられない現実を道也は「開化が進めば進む程競争が益劇しくなつて生活は愈困難になるやうな気がする」「生存競争から生ずる不安や努力に至つては決して昔より楽になつてゐない、否昔より却つて苦しくなつてゐるかも知れない」⁴⁸⁾と認識し、進歩を至上の価値と見なす社会の風潮を明確に批判している。ここに明治44年8月13日に明石で行われた講演『職業と道楽』の一節を併置して見れば、「不幸」「不安」が社会発展の結果として思わぬ形で浮上してくることへの自覚が明確にうかがえるのである。

開化の潮流が進めば進む程又職業の性質が分れ、ば分れる程、我々は片輪な人間になつて仕舞ふといふ妙な現象が起るのであります、言ひ換へると自分の商売が次第に専門的に傾いてくる上に、生

存競争の為に、人一倍の仕事で済んだものが二倍三倍乃至四倍と段々速力を早めて逐付かなければならぬから、其の方だけに時間と根気を費しがちであると同時に、お隣りの事や一軒置いたお隣りの事が皆目分らなくなつて仕舞ふのであります、⁴⁹⁾

周囲に対する適切な判断力を喪失した状況下において、妥協せず自らの価値判断に沿つた行動のみを追求すれば周囲に対して我儘な振舞ひをし兼ねないが、漱石はその具体的な分析を『三四郎』の中で描いている。三四郎に語りかける広田先生は当代を生きる人々が「偽善家」から「露悪家」へ変化したという見解を披露するのである。

近頃の青年は我々時代の青年と違つて自我の意識が強過ぎて不可ない。吾々の書生をして居る頃には、する事為す事一として他を離れた事はなかつた。凡てが、君とか、親とか、国とか、社会とか、みんな他本位であつた。それを一口にいふと教育を受けるものが悉く偽善家であつた。その偽善が社会の変化で、とう／＼張り通せなくなつた結果、漸々自己本位を思想行為の上に輸入すると、今度は我意識が非常に発展し過ぎて仕舞つた。昔しの偽善家に対して、今は露悪家ばかりの状態にある。⁵⁰⁾

このような理解を前提にすれば、「自分の神経は、自分に特有なる細微な思索力と、鋭敏な感応性に対して払ふ租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報に受る不文の刑罰である。是等の犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に為れた。」⁵¹⁾と述べ、高等教育を受けた結果として細微な心理的变化に耐えていかなければならない状況を客観的に分析しつつ、自己本位を貫こうとする『それから』の代助とは自己を露悪家と規定している存在であると言える。こうして見れば、「他人本位から自己本位への、いってみればコペルニクスの転回とでもいべき変革」⁵²⁾を遂げた漱石の意識は明確に確認できるのである。

4. 社会状況への不安

「三十になるか、ならないのに既に nil admirari の域に達して仕舞つた」⁵³⁾代助の目に映つた日本とは社会全体が無理を重ねた状態の中で齷齪している姿であった。

第一、日本程借金を拵らへて、貧乏震ひをしてゐる国はありやしない。此借金が君、何時になつたら返せると思ふか。そりや外債位は返せるだらう。けれども、それ許りが借金ぢやありやしない。日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。それでゐて、一等国を以て任じてゐる。さうして、無理にも一等国の仲間入をしようとする。だから、あらゆる方面に向つて、奥行を削つて、一等国丈の間口を張つちまつた。なまじい張れるから、なほ悲惨なものだ。牛と競争をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。其影響はみんな我々個人の上に反射してゐるから見給へ。斯う西洋の圧迫を受けてゐる国民は、頭に余裕がないから、碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使はれるから、揃つて神経衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と、身体の衰弱とは不幸にして伴なつてゐる。のみならず、道德の敗退も一所に来てゐる。日本国中何所を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ。其間に立つて僕一人が、何と云つたつて、何を為したつて、仕様がないさ。⁵⁴⁾

代助の批判は社会の発展に伴う弊害を浮き彫りにしたもののだが、同様の問題は『行人』でも鋭く描かれていると言つてよい。長野一郎は同僚のHさんと共にした旅先で、科学の発展が人々にもたらす不安について語っているからである。

人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事が無い。徒歩から俵、俵から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、何処迄行つても休ませて呉れない。何処迄伴れて行かれるか分らない。実に恐ろしい。⁵⁵⁾

つまり、漱石は明治という時代が幾何級数的な発展と引き換えにその進歩から取り残される不安を人々に強いる雰囲気をもたらす悪影響を極めて重く認識していたのである。一郎は知識人が直面する不可避の不安を「人間全体が幾世紀かの後に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに経過しなければならないから恐ろしい。」⁵⁶⁾と述べ、更にはニーチェの『ツァラ

トウストラはかく語りき』の一節を引用し、「Keine Brücke führt von Mensch zu Mensch.(人から人へ掛け渡す橋はない)」⁵⁷⁾、「Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit! (孤独なるものよ、汝はわが住居なり)」⁵⁸⁾とつぶやいてもいることから、この問題の深刻性は浮き彫りにされているのである。

『三四郎』では与次郎が広田先生のことを三四郎に「万事頭の方が事実より発達してゐる」⁵⁹⁾と言う。科学が発展すると観念が現実世界より複雑化している知識人を生みかねないという問題は『行人』でも繰り返して問題にされている。『行人』では精神的に行き詰つた一郎をHさんが旅行に連れ出し、Hさんが一郎の弟である二郎に一郎の様子を手紙で報告する。Hさんは一郎の思索が現実社会を遥かに凌駕しており、そのために現実に対して批判的な様子を「兄さんの予期通りに兄さんに向つて働き懸ける世の中を想像して見ると、それは今の世の中より遥に進んだものでなければなりません。従つて兄さんは美的にも智的にも乃至倫理的にも自分程進んでゐない世の中を忌むのです。」⁶⁰⁾と分析している点などはその典型例であると言えよう。

一郎は突き詰めた思索の結果をHさんに「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」⁶¹⁾と述べるしかなく、観念の世界にのみ生き、実際的に何ら行動し得ない状況への不満は「然し何うしたら此研究的な僕が、実行的な僕に変化出来るだらう。どうぞ教へて呉れ」⁶²⁾と言つて示される通りである。Hさんは一郎に関する所見を「私は天下にありとあらゆる芸術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ尽して、少しの研究的態度も萌し得ない程なものを、兄さんに与へたいのです。」⁶³⁾と書き記すが、ここに『彼岸過迄』で松本恒三が須永市蔵について「天下にたつた一つで好いから、自分の心を奪ひ取るやうな偉いものか、美しいものか、優しいものか、を見出さなければならない。一口に云へば、もつと浮気にならなければならない」⁶⁴⁾と市蔵の親友・田川敬太郎に叔父の目で語つた言葉を併置してみると、両者が驚く程の共通認識で貫かれている様子に気づく。高等教育を受け、知を発達させ、突き詰めた思索に逆に懊悩し、疲れ果てる現実を前にして、論理を離れた感情に安らぐ精神状態を体験することで心理的安定を得ていかななければならないという問題意識が繰り返し追求されている様子がかうかがえるからである。

一方、『心』では先生が「私」に対して「私は淋し

くつても年を取つてゐるから、動かずにゐられるが、若いあなたは左右は行かないのでせう」⁶⁵⁾と語りかける。ここで先生が「私」に向けている眼差しは松本の須永に対する、またHさんの一郎に対する態度にも似た人生経験豊富な立場からの慈愛に溢れた態度で貫かれているが、その判断を松本やHさんとは異なって直接相手に投げかけている。その後、先生は「私」宛に書き記した遺書の中で、「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないのでせう」⁶⁶⁾と言い、現代人は孤独な精神状態を必ず引き受けなければならないという見解を示している⁶⁷⁾。ここからは須永や一郎のような追い詰められ方は程度の差こそあれ、時代の進歩に伴って普遍的に見られる現象であるとの認識に漱石が到達している様子がよく分かるのである。

5. 落差への認識

『心』で「私」は話題としていく相手を一貫して「先生」と称する⁶⁸⁾。「私」は年長者をそのように呼ぶのが礼儀だという立場に立つが、漱石は『心』完結直後に学習院での講演『私の個人主義』において、『心』で先生が「私」に向かって語りかけた様子にも似た口調で自らの主張を同時代の青年に向けて託している。

貴方がたは是からみんな学校を去つて、世の中へ御出掛になる。それにはまだ大分時間のかゝる方も御座いますし、又は追付け実社会に活動なさる方もあるでせうが、いづれも私の一度経過した煩悶（たとひ種類は違つても）を繰返しがちなものぢやなからうかと推察されるのです。私のやうに何処か突き抜けたくつても突き抜ける訳にも行かず、何か掴みたくつても葉鏝頭を掴むやうにつる／＼して焦燥つたくなつたりする人が多分あるだらうと思ふのです。もし貴方がたのうちで既に自力で切り開いた道を持つてゐる方は例外であり、又他の後に従つて、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとは決して申しませんが、（自己に安心と自信がしつかり附随してゐるならば、）然しもし左右でないとしたならば、何うしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てる所迄進んで行かなくつては行けないのでせう。行けないといふのは、もし掘り中てる事が出来なかつたなら、其人は生涯不愉快で、始終中腰になつて世の中にまご／＼してゐなければならないからです。⁶⁹⁾

漱石は学生に向けて自らの力で進むべき道を捜し求めていく姿勢が不可欠であり、納得できる境地に達するまで努力を続けなければならないとの認識を示している。しかしながら、主体的に生き方を模索する次世代の青年とは『心』の「私」が「私は国へ帰るたびに、父にも母にも解らない変な所を東京から持つて帰つた。昔でいふと、儒者の家へ切支丹の臭を持ち込むやうに、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかつた。」⁷⁰⁾と回想するように彼らを育てた親世代（明治以前に生まれた旧世代）には違和感を感じさせる存在でもあるのである。

同様の視点は『道草』の健三にも受け継がれている。作品は以下のように始まっている。

健三が遠い所から帰つて来て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。

彼の身体には新しく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。⁷¹⁾

ここに描かれた健三とは留学から帰国直後の大学教授で、「三十六歳の主人公健三は、三十七歳から四十歳頃までの漱石自身である」⁷²⁾との見方が通説となっている。漱石の次男・伸六は帰朝後間もなくの頃の漱石を「極端に切りつめられた孤独の生活と、過度の勉強のためか、留学中強度の神経衰弱に罹り、気が違ったのではないかと思われる妙な印象まで傍の者に与えたというその悪化した父の頭の状態は、何年ぶりかで踏む故郷の土に接しても、決してからりとは晴れなかつたようである」⁷³⁾と解釈しているが、その状況とは「苦心の末に二年間の悪戦苦闘を経て西洋社会での異文化の異質性によって生じた不安や抑圧を克服し、帰国した途端、故郷と西洋文化との異質性の障壁がまたしても彼をとりかこみ、逆の異文化の障壁として彼にショックを与えた」⁷⁴⁾というべき性格のものであった。留学の結果得た国際的教養や斬新な知見、比較文化的視野の獲得とは逆に故郷や出自となった文化との隔絶と隣り合わせにある痛みを引き受けなければならないことをも意味する。その事実は明確に認識された上で『道草』に書き記されているのである。

6. 結 語

漱石は一貫して時代の影響を濃厚に受けながら社会を生きる個人が抱え持つ問題に目を注ぎ、国家的な視野との関わりの中で問題を抉り出し続けた作家であった。留学経験や幅広い読書による西洋文化への精通、また、英文学者兼教師から朝日新聞専属作家へという形で時代の最先端を教育、啓蒙する使命を全うした職歴は冷静な社会批判や国際情勢の分析を可能にもした。時代の進歩に警笛を鳴らした漱石の立場はその後もますます速い速度で変化を続ける社会に生きる我々にとって再評価すべき教訓に満ちているのである。

注

- 1) 尾上新太郎「夏目漱石の国家観にふれて」、『日本語・日本文化研究』第11号 大阪外国語大学日本語講座 2001年11月 2頁
- 2) 『漱石全集 第9巻』 岩波書店 1994年9月 297頁
- 3) 『漱石全集 第3巻』 岩波書店 1994年2月 428頁
- 4) 『漱石全集 第5巻』 岩波書店 1994年4月 294頁
- 5) 林正子「近代日本における〈文化〉の誕生—〈文明〉から〈文化〉へ、〈教養思想〉から〈文化主義〉へ—」、末永豊、津田雅夫編著『文化と風土の諸相』文理閣 2000年10月 220頁
- 6) 『漱石全集 第16巻』 岩波書店 1995年4月 356頁
- 7) 赤井恵子「漱石の「開化」、論吉の「文明」—福澤論吉と夏目漱石 その一—」（『熊本学園大学 文学・言語学論集』第7巻第2号通巻第14号 熊本学園大学文学・言語学論集編集会議 2000年12月）が「マードック先生の日本歴史」を「漱石の〈文明〉観を考える上で相当な重要性を持つ」（192頁）と評価した上で分析している。
- 8) 行程は、荒正人著、小田切秀雄監修『増補改訂 漱石研究年表』（集英社 1984年6月 234～326頁）に詳しい。
- 9) 『漱石全集 第19巻』 岩波書店 1995年11月 66頁
- 10) 漱石は明治38年9月から大学を辞職する明治40年3月まで東京帝国大学で〈十八世紀英文学〉を講じ、その内容は明治42年に春陽堂から単行本『文学評論』として出版されたが、そこでは「第二編 十八世紀の状況一般」として、「一 十八世紀に於ける英国の哲学」、「二 政治」、「三 芸術」、「四 珈琲店、酒肆及び倶楽部」、「五 倫敦」、「六 倫敦の住民」、「七 娯楽」、「八 文学者の地位」、「九 倫敦以外地方の状況」（『漱石全集 第15巻』 岩波書店 1995年6月 56～173頁）の各章において英国地域事情が詳細に論述されており、漱石の理解した西欧を具体的に知ることができる。また、留学時代の漱石の足跡は、稲垣瑞穂『夏目漱石ロンドン紀行』（清文堂 2004年10月）が詳細な現地調査の結果に基づいて報告している。
- 11) 平川祐弘『夏目漱石—非西洋の苦闘—』 講談社 1991年11月 17頁
- 12) 『漱石全集 第14巻』 岩波書店 1995年8月 12～13頁
- 13) 『漱石全集 第12巻』 岩波書店 1994年12月 449頁
- 14) 度會好一「イギリス嫌いと文明批評—漱石とイギリス世紀末の遭遇—」（『成蹊人文研究』創刊号 成蹊大学大学院文学研究科 1993年3月）は漱石の「イギリス嫌い」を「ロンドンへ来て始めて新たになった西欧と近代日本との関係についての認識と心理の複雑な複合こそ、その核であると推察される」（11頁）と位置付けている。
- 15) 『漱石全集 第21巻』 岩波書店 1997年6月 129頁
- 16) 注9) 203頁
- 17) 村松剛「「自己本位」のこゝろ—漱石、和辻、鷗外—」、『新潮』第89巻第7号 1992年7月 199頁
- 18) 『漱石全集 第20巻』 岩波書店 1996年7月 187頁
- 19) 『漱石全集 第25巻』 岩波書店 1996年5月 266頁
- 20) Nakayama, Etsuko. „Natsume Sôseki in England: The Meaning of His Encounter with the West.“ *Journal of Comparative Literature* 32 (1990): 216.
- 21) 小林章夫『漱石の「不愉快」』 PHP 研究所 1998年7月 96頁
- 22) 注6) 430頁
- 23) 注6) 437頁
- 24) 川副国基「文明批評家としての漱石」、『国文学研

- 究』第43集 早稲田大学国文学会 1971年1月
402頁
- 25) 『漱石全集 第8巻』 岩波書店 1994年7月
263頁
- 26) 注9) 204頁
- 27) 『漱石全集 第4巻』 岩波書店 1994年3月
243頁
- 28) 近代作家用語研究会, 教育技術研究所編『作家
用語索引 夏目漱石(第I期)第2巻 坊っちゃん』
教育社 1984年10月 132頁
- 29) 近代作家用語研究会, 教育技術研究所編『作家
用語索引 夏目漱石(第I期)第5巻 それから』
教育社 1984年10月 222頁
- 30) 近代作家用語研究会, 教育技術研究所編『作家
用語索引 夏目漱石(第I期)第6巻 門』 教育
社 1984年10月 192頁
- 31) 近代作家用語研究会, 教育技術研究所編『作家
用語索引 夏目漱石(第I期)第7巻 彼岸過迄』
教育社 1984年10月 248頁
- 32) 近代作家用語研究会, 教育技術研究所編『作家
用語索引 夏目漱石(第I期)第8巻 行人』 教
育社 1984年10月 276頁
- 33) 近代作家用語研究会, 教育技術研究所編『作家
用語索引 夏目漱石(第I期)第9巻 ころ』
教育社 1984年10月 189頁
- 34) フランツ・ヒンターエーダー・エムデ「近代の
影 漱石の宗教を巡る懐疑とアイデンティティー」
〔『第4回国際日本学シンポジウム報告書〈国際〉
日本学との邂逅』 お茶の水女子大学大学院人間文
化研究科国際日本学専攻・比較社会文化学専攻
2003年3月 2-34頁〕は、「漱石も又神経衰弱に
悩まされていました。よく漱石個人の性格のせい
に取られていますが、当時の精神的な流れの中
で見えますと彼の特有の性質だけでは片づけられ
ないことで、ヨーロッパでも「神経衰弱」ドイ
ツ語で「Nervosität」は、当時の流行り言葉とな
っているほどでした。」と述べている。
- 35) 注3) 90頁
- 36) 注4) 536~537頁
- 37) 新矢昌昭「近代への視角—漱石とウェーバー—」,
『羽衣学園短期大学研究紀要』第39巻 羽衣学
園短期大学 2003年1月 53頁
- 38) 注3) 167~168頁
- 39) 大竹雅則「倫敦の憂鬱—「自己本位」の獲得—」,
全国大学国語国文学会編『文学・語学』第126号
桜楓社 1990年7月 74頁
- 40) 宮本盛太郎「二人の個人主義者—夏目漱石とウ
ィリアム・ジェームズ—」, 政治経済史学会編『政治
経済史学』第360号 日本政治経済史学研究所
1996年5月 2頁
- 41) 注6) 595頁
- 42) 久山康「日本の近代化と伝統—夏目漱石の思想
の展開をめぐって—」, 『人文論究』第15巻第1号
関西学院大学人文学会 1964年4月 25頁
- 43) 高田瑞穂「近代的・西洋の漱石」, 『国文学 解釈
と鑑賞』第40巻第2号 至文堂 1975年2月 24
頁
- 44) 出口保夫『ロンドン漱石文学散歩』 旺文社
1986年5月 33頁
- 45) 注6) 593頁
- 46) 注3) 433~434頁
- 47) Mizuta, Makoto. „NATSUME Soseki's Life and
Thought in the Age of Japanese Modernization.“ *The
Bulletin of Fukuoka Dental College and Fukuoka Col-
lege of Health Sciences* 29 (2002): 3.
- 48) 注3) 427頁
- 49) 注6) 402~403頁
- 50) 注4) 463~464頁
- 51) 『漱石全集 第6巻』 岩波書店 1994年5月
13~14頁
- 52) 佐古純一郎「夏目漱石の個人主義」, 『二松』第4
集 二松學舎大学大学院文学研究科 1990年3月
5頁
- 53) 注51) 28頁
- 54) 注51) 101~102頁
- 55) 注25) 395~396頁
- 56) 注25) 396頁
- 57) 注25) 406頁
- 58) 注25) 407頁
- 59) 注4) 359頁
- 60) 注25) 411頁
- 61) 注25) 412頁
- 62) 注25) 429頁
- 63) 注25) 438頁
- 64) 『漱石全集 第7巻』 岩波書店 1994年6月
309頁
- 65) 注2) 21頁
- 66) 注2) 41頁

- 67) Strack, Daniel C. „Paranoia in the Writing of Natsume Soseki.“ *Journal of the Faculty of Humanities, Kitakyushu University* 56 (1998) : 117-134. は、漱石作品登場人物におけるパラノイア傾向の存在と影響を『心』を中心に広く論じている。
- 68) 英訳 (Sôseki Natsume, *Kokoro* translated by Edwin McClellan. Washington, D.C.: Regnery Publishing, Inc, 1957.), ドイツ語訳 (Sôseki Natsume, *Kokoro* übersetzt von Oscar Benl. Zürich: Manesse Verlag, 1976.) では Sensei, 中国語訳も「先生」(夏目漱石著, 林少華訳『心』花城出版社 2000年4月) のままであり, 翻訳の立場から見た場合, この呼称に潜む独特のニュアンスを意識せざるを得ない状況がうかがえる。
- 69) 注6) 597頁
- 70) 注2) 65頁
- 71) 『漱石全集 第10巻』 岩波書店 1994年10月 3頁
- 72) 岡崎義恵『漱石と則天去私』 宝文館出版 1968年12月 339頁
- 73) 夏目伸六『父・夏目漱石』 文藝春秋 1991年7月 138~139頁
- 74) 藤田榮一『漱石と異文化体験』 和泉書院 1999年3月 224頁

